

## 和歌

著者	夕の子, 雨の子, 俊佐久
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 0 0
ページ	1 7 9 - 1 8 0
発行年	1903-06-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5703">http://hdl.handle.net/2298/5703</a>

## 和歌

夕の子

遂に接せざりし。蓋し是れ我が校の平和にして奉平無事なるの瑞祥ならんか。

以上は最も簡単に過去に於ける本誌の徑路を記せり。今顧みて更に之を通評せんか、第一期より第五期に至るまでは之を進歩の時代と稱すべく此間號毎に期毎に其の面目を改新しつつ進めり第六、七期は之を隆盛の時代と稱すべく既に完全なる一雜誌として我が五高の面目を發揮するに足れり。第八期は沈滞の時代にして駸々として進みし我が誌運は少しく頓挫の觀ありき。第九、十期は之を活躍の時代と謂ふべく滿幅の霸氣天を衝くの慨あり。第十一、十二期は正に整備の時代にして記事の配置内容共に殆んど完全の域に達せるが如し。

我が龍南會雜誌が今日あるを致せる其の由て來る所や實に斯くの如し。吾人は今此の一世紀の終末に際し、過程の歷程を願望して感慨の頗る大なるものあるを覺ゆるなり。

流れては行へも知らぬ野のはてに水よ落花よあ  
ゝ春行くか

一ひらは岸に一ひらは水に散る花にも見ませつ  
れなの定め

ふと出でゝ月に笑む子をよべ見たり茅屋をめ  
る野川のはどり

酒なきも趣味ろこなはじとゝ深山花守一夜宿  
したまへ

野べ一里霞の奥に白壁の見ゆるかしこは人ぬ  
す里

月今宵若き一人が詩のねごりたもひきあるかな  
森の十禪寺

雨の子

野のはてに若葉の森の動かさる浮き出でざるは  
低迷の子か

鳥もなけ若葉も茂れ雨もふれ山家の興はかくて  
ぞ多き

花老て八十の翁としをるれば園の夕はたゞすむ  
もちろ

月見草白日たへざる趣きか旅の半に故郷思ふも

の

○百號を祝して 俊左久

龍の子の雲に乗るべき相なりぬ今もとせの齡  
へぬれば

昇天のよろほひなりてけふよりぞ雲呼び起す龍  
の姿や

○笛

庵を出でる月の流るる谷水に笛ひたし居れば鳴  
くはとくぎす

笛吹きて君來ます夜の靡る月柴の戸露に我れ立  
ちぬれし

友逝きて暮の戸笛の調合はず散る櫻にも運命悲  
しき

亡き友のかたみの笛の塵をはらひ夕べさびしく  
吹きて見るかな

さながらに君が奥津城ゆらぐかな力籠めたる笛  
の響に

俳句

紫 溟 吟 社

龍南會雜誌第百號を祝す

垂るるなり藤一百の房となり  
白百合の花びらてらす螢哉  
南斗 藤坊

雷鳴つて若竹のびぬ一百尺  
神なつて瀧百丈のたけり哉  
紫村 南斗

風に登れ龍門高し鯉のぼり  
百歳の松の老木や若葉山  
鬼灯 紫村

双松紫水雨城三子を送る  
詣でなば富士の百句の便りせよ  
呼雲 南斗

笠脱いで憩へよ比叡の青あらし  
船で行け瀬戸は涼しき浪の音  
紫村 呼雲

葉櫻に團子召しませ向島  
若葉する函根は月に越ゆらんか  
鬼灯 紫村

松涼し須磨につかれの面<sup>ツラ</sup>向けよ  
藤坊 鬼灯